

氏名	所 恭子
学位の種類	博士（看護科学）
学位記番号	博甲第 7914 号
学位授与年月	平成 28 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	出産後の女性の精神・身体症状の経時的変化とその評価

主査	筑波大学教授	博士(工学)	川口 孝泰
副査	筑波大学准教授	医学博士	山海 知子
副査	筑波大学助教	博士(看護学)	福澤 利江子
副査	筑波大学准教授	博士(体育科学)	三木 ひろみ

論文の内容の要旨

所恭子氏の博士学位論文は、出産後に起こる女性の健康状況を把握するとともに、生理学的指標となる自律神経活動の変化を捉えることで、看護実践のための新たな健康指標を得ることを目的に行ったものがある。その要旨は以下のとおりである。

(目的)

女性の人生において妊娠・出産は大きなイベントである。とくに生殖期の心身症状は、生涯を通じて女性の健康に大きな影響を及ぼす。出産後の時期に女性の健康を診査し、適切な支援を行うことは、自身の健康のみならず、子どもや家庭、社会にとっても重要である。本研究は、出産後に起こる健康実態を把握するとともに、産後の自律神経活動の変化を捉えることが、看護の実践に役立つ健康指標として使用可能かどうかについての検証を行った。

(対象と方法)

本研究は、以下の 2 つの研究によって構成されている。

<研究 1：出産後 1 年までの女性に関する自記式質問紙による健康評価>

出産後の女性を対象に、医療施設または保健施設への受診または子育てセンターなどに参加する母親 909 人を対象に、自記式質問紙を配布・回収し、出産後のどの時期にどのような症状を持っているのかを調査した。調査項目は労働疲労を調査するための「自覚症状しらべ」の 30 項目と、抑鬱症状および乳房症状を調査した。分析は各症状項目について記述統計を行った上で、母親の背景、母乳育児の状況、

児の状況、家族環境などとの関連性について推測統計分析を行った。

<研究 2 : 心拍変動を用いた出産後の女性の自律神経機能評価>

研究 1 で明らかになった出産後の女性の健康状態に関する関連性を客観的に検証し、同時に出産後の自律神経機能とその時間的推移を評価することを目的とした。方法は、研究 1 と同様に、自記式質問紙による自覚症状しらべ、および新版 State-Trait Anxiety Inventory (STAI) による不安度チェック、および心拍変動解析による自律神経活動の変化を計測した。対象は産科医療施設で出産し、産後健診を受診予定の 17 人とし、出産後 0, 1, 3 か月において縦断的な調査および計測を行った。分析は質問項目および心拍変動の中央値での記述的統計と、体位変換試験によって心拍変動成分の中央値を比較対象として、自律神経機能を心拍ゆらぎ解析手法を用いて評価した。

(結果)

<研究 1 : 出産後 1 年までの女性に関する自記式質問紙による健康評価>

主観的疲労感は 9 点満点で、平均 4.6 点で産後時期による有意差はみられなかった。平均訴え数は、自覚症状 I 群 4.3、II 群 2.7、3 群 2.8 で、I ~ III 群の合計は 9.8 であり、先行研究で行われた介護職員の夜勤明けのデータと比較すると、その値よりも高値となっていた。

自覚症状しらべの 30 項目をもとに、各月間の症状により産後 1 年間で 1 か月、2 か月、3 か月移行に分けて分析した結果、合計個数は 1 か月 9.4 個、7-11 か月で 12.6 個と、時期を経たことで増加した。これまで産後 3 週間程度で「帯があける」「床をあげる」など、産後の身体症状が回復したとする風習があるが、今回の研究結果を、江守ら (1987)、服部ら (2000) による先行研究の結果と合わせて考えると、出産後 1 年まではさまざまな症状が持続していたと考えられる。

<研究 2 : 心拍変動を用いた出産後の女性の自律神経機能評価>

安静時での計測値は、心拍数は 0 か月が最も高く、経時的に減少した。心拍変動による自律神経の副交感神経活動の指標となっている高周波成分が経時的に高くなっていた。交感神経活動の指標とされる低周波成分/高周波成分比は、1 か月で高値となり、3 か月では減少した。立位での計測においても、心拍数は 0 か月で最も多く、経時的に減少していた。これらの結果は、循環血流量の減少や胸郭体積の拡張など、生理的な変化の影響が考えられるとともに、出産後 1 か月は、睡眠不足であること、育児労働により眠くても起きていなくてはならないこと、などの育児要因や出産後のサポートが少なくなるという要因も考えられた。相関分析では高周波成分と III 群に正の相関、体位変化に伴う高周波成分の変化と I 群 ~ III 群には相関があった。とくに立位前後で差がある場合は、自覚症状や不安の指標である STAI 得点が高いケースがあり、疲労と関連する可能性が示唆された。

(考察)

研究 1 の結果から、母親の自覚症状の中心は、一般的な労働疲労であることが示唆された。とくに経産婦において産後 3 か月以降で自覚症状が多くなっていることから、慢性疲労に移行していることが推察された。産後 1 年間を通して頻度の多い項目は「あくびが出る」「ねむい」「横になりたい」「肩がこる」であった。また、乳房症状は初産婦において 1 か月で有意に多かった。以上から、出産後 1 年以内の母親に対する支援は、睡眠不足への支援、とくに初産婦においては 1 か月までの母乳育児支援、経産婦では 3 か月以降の育児支援の重要性が示唆された。

研究 2 の結果から、不安化傾向の指標である STAI の結果と自覚症状に正の相関関係があった。このことは、身体症状と不安との関連性が示唆された。日常のアセスメントにおいては、母親が特定の症状を訴える場合、その症状のみならず、常に不安や気分についても十分に聴取する重要性が示唆された。また、母親が不特定の症状を持っている場合、疲労があっても自身は気付いていないことが予想される。このことから健康診査の際に自覚症状だけに頼らず、自律神経機能の計測などを含む、客観的な指標を用いることは、出産後の母親へのアセスメント指標として有用であると考えられた。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、出産後の女性の心身症状を調査すること、および自律神経機能の計測によって、出産後の心身の状態を客観的に評価しうるかを検証したものである。その結果、出産後 1 年以内の女性は、「頭がおもい」、「全身がだるい」などの身体症状、「考えがまとまらない」、「話をするのが嫌になる」、などの精神症状がみられ、また「頭が痛い」、「肩がこる」など、身体的違和感、疲労症状、抑うつ症状、乳房症状など、様々な自覚症状が生じていることも把握できた。

自覚症状しらべによる症状の保有率は、30 個中 9.4 個、産後 3 か月以上では 12.6 個と経時的に増加していた。産後 1 年間を通して変わらない症状として「あくびが出る」「ねむい」「横になりたい」「肩がこる」などで、睡眠不足への対処が必要とされた。出産後の自律神経機能は、産後 1 か月では、副交感神経、交感神経ともに高値となった。自律神経機能は、STAI の得点および自覚症状と相関がみられた。

出産後の女性の健康を保障し、疾病を予防する見地から、初産婦では 1 か月までの母乳育児支援、経産婦では 3 か月以降の複数の子をもつ親に対する育児支援が有効であり、1 か月健診だけではなく、少なくとも 3 か月までの月ごとの心身状態のアセスメントが必要である。これらの結果は、出産後の女性に対する看護ケアの在り方に新たな示唆を与える知見として高く評価された。

平成 28 年 5 月 9 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。